

宮津市世屋の藤織り発見史の周辺と藤織りの復活

山崎光子

(県立新潟女子短期大学)

1 はじめに

昭和52年4月に機会を得て、まだ殆ど断片的にしか記録されることがないままに関心を持たれていた上世屋の藤布の調査に入り、地元の農協支所ならびに織り手の積極的な協力をえて、聞き取りならびに藤布織りの工程を写真に収めた。その調査結果に文献調査を加えてまとめたものは、同年昭和52年10月に「上世屋の藤布織り」と題して日本風俗史学会第18回大会で口頭発表をしたほか、「上世屋の藤布織りの作業工程」の詳細等については、おくればせながら前報『民俗服飾研究論集』第2集(1)に、また「上世屋の藤織り生活史」については『民俗服飾研究集』第3集(本誌)に報告した。

ところで、風俗史学会大会の初日、すなわち上世屋の藤布についての発表の前日の懇親会の席上で、レジメを見た諸先生方から、また当日の発表後の質疑応答時にも、新たな情報などの貴重な資料提供やご教示をいただいたのであるが、その中でも、特に、世屋の藤布織りの存在を最初に確認した時期が、一般に知られている日より、早いという事実があり、それについては、当日の発表に加えたものの、その後そのままになっており、また一般にもさして修正されることもないまま今日に至ってしまっている。記録に残す必要があると思われるので資料としてここに報告する。

2 下世屋の藤織りの発見

さて、「上世屋の藤布織り」の風俗史学会大会での口頭発表の前日には、先に述べたように諸先生方から多くの御教示を頂くことができたが、まず、下世屋の藤布の発見の年月日については、昭和40年の『日本民芸織物全集』、昭和50年の『日本伝統織物全集』(2)に記載されているように、昭和37年8月19日、京都府教育委員会文化財保護課が丹後半島の緊急民俗調査にあたった時に偶然、竹野郡丹後町袖志の浜(「藤織り生活史」の図1参照 本誌 頁)で海女が海草を入れる袋に使っていた藤布を発見し、それがまだ世屋で織られている事実を知らされた」のが端緒として知られており、その後の文献にも引用され続けているが、その調査の

中心人物でもあった柴田実氏(元京都大学教授)から、直接、当時の様子をお聞かせいただくことができた。

そして同時に、織物研究者の太田英蔵氏(元川島織物顧問)からは、世屋の藤布については、それ以前にすでに太田氏が着目していたということ、そして世屋の藤布織りの存在の発見とされている日より5カ月前の昭和37年3月18日に、地元の与謝郡加悦町の従兄弟の土田俊治氏に案内されて下世屋に調査にでかけられたこと、それらのことは昭和51年1月の『京都の林業』3頁に「藤の衣」と題して文献調査も加えて掲載してある事などを教えていただき、それを当日の発表に加えて頂くことができた。

太田氏からは同学会での『越後の紅緋』の発表(昭和46年)以来親しく京都のご自宅に伺わせていただいたりしていたが、特に、「藤の衣」の掲載紙や土田俊治氏の手紙などについては、その後伺った時に、書籍に埋もれたお部屋の片隅から出されてきて、関連の資料を全部並べて説明して下さったり、わざわざ近所までかけてコピーして下さったりしたのが、鮮やかな記憶として残っている。

京都府立丹後郷土資料館の画期的な「藤織りの世界展」が開かれた昭和56(1981)年10月(会期 10月6日~11月15日)、見学に行った筆者がその充実した企画・展示の内容を太田氏にお知らせしたために、資料館の井之本氏に速達での図録(3)の送付を依頼、実演の日程表も添えて井之本氏が太田氏に速達で送ってくださった日が10月22日、その10日後くらいに太田氏は遠路、丹後郷土資料館に出掛けられているが、そのあともなく11月28日には不帰の人となられてしまった。丹後郷土資料館で藤織りを見たあと太田氏は、井之本氏とゆっくり話をしたいご様子だったが、藤布織り実演のおばあさん達を上世屋まで送るために果たせなかったと井之本氏は残念がっていた。

ご夫人の太田千代子氏のもとには端の擦り切れた図録が送付の文書入りのまま遺されていた。また、『京都林業』の「藤の衣」と一緒に掲載された「藤布を績む婦人」の写真と同時撮影の数葉の写真(図1)が、近所の写真屋の袋入りのまま表に「下世屋の藤布」と

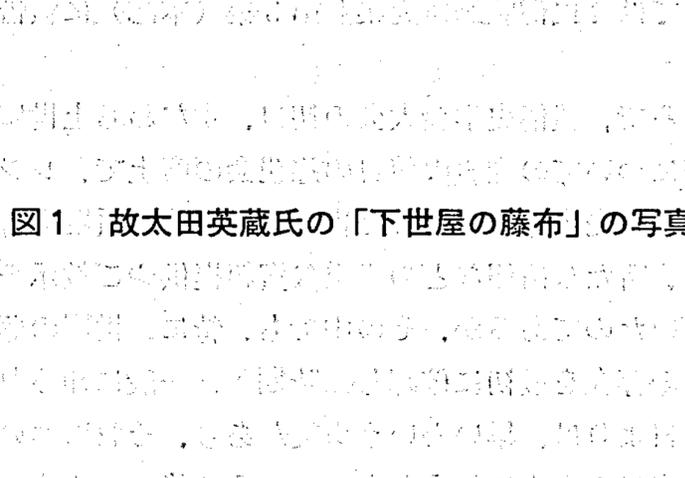
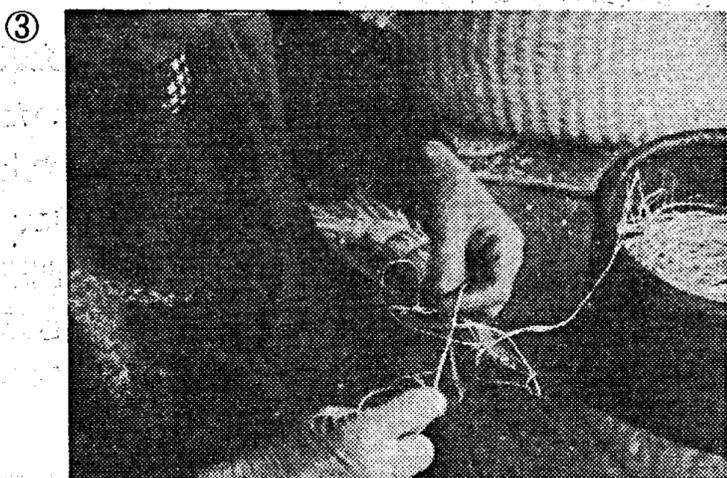
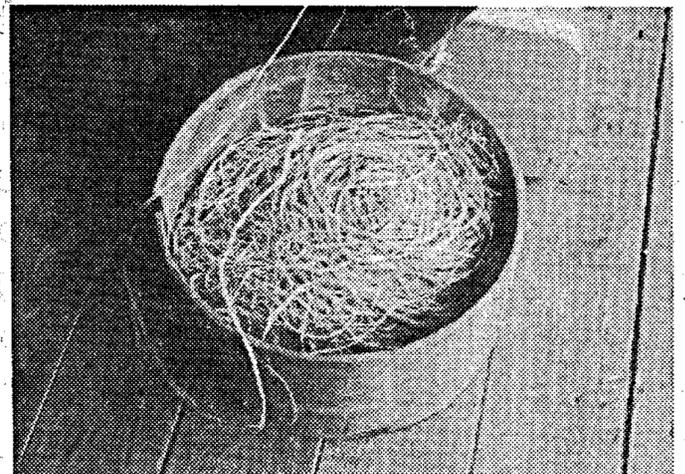
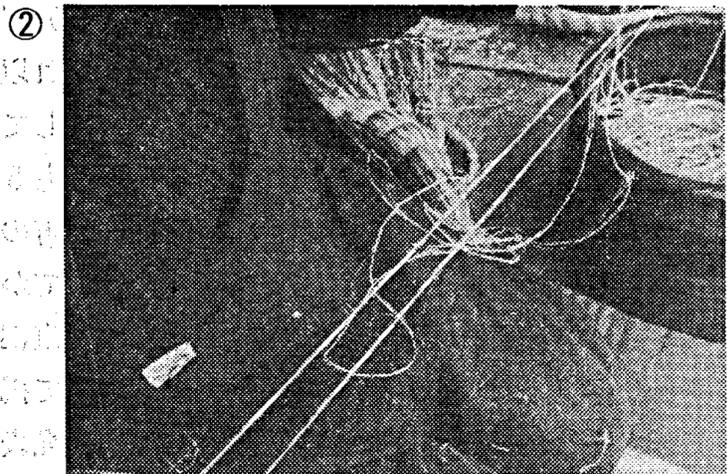
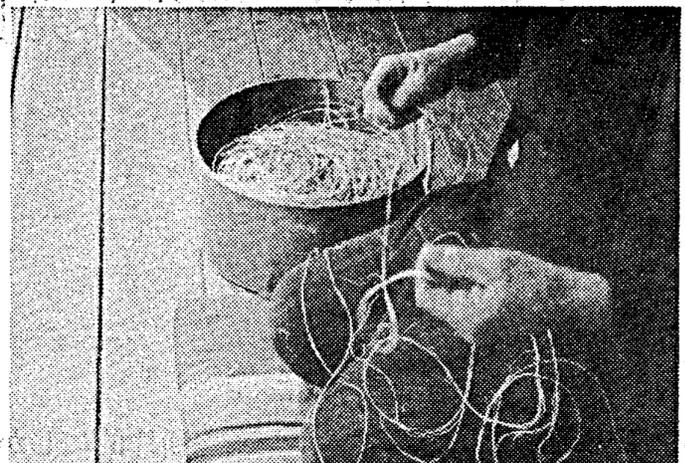
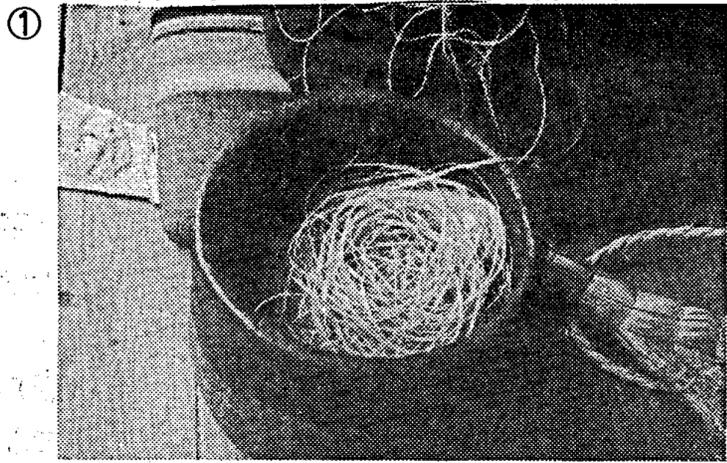


図1 故太田英蔵氏の「下世屋の藤布」の写真

太田氏の字で書かれてのこされてあり、また藤布資料の実物（図2）もあった。本文に「その村の梅本すがさん（当時70才）は、わざわざ糸を紡いでみせてくれた」とあるから、その昭和37年3月に撮影、採集したものではないかと思われる。太田夫人から資料をお借りしたので掲載する。

太田氏の「藤の衣」の掲げた『京都の林業』の昭和51年1月号は京都府農林水産部林務課編集、京都府材業改良普及協会発行のものであるが、問い合わせたところ、発行当時編集者だった林業試験場長の高野氏が太田氏と懇意だったため原稿を依頼したものだという。

本文には、「フジの枝から糸がとれて、これを織って布としているのを、丹後の下世屋まで見に行ったのは昭和37年3月18日のことだった。私の従兄弟で加悦町の土田俊治君に案内されてのことだった。一中略一藤の蔓から布が織れるなんて、およそ彼も考えてもいなかったから、縮緬屋だけにこれを見たときには驚い

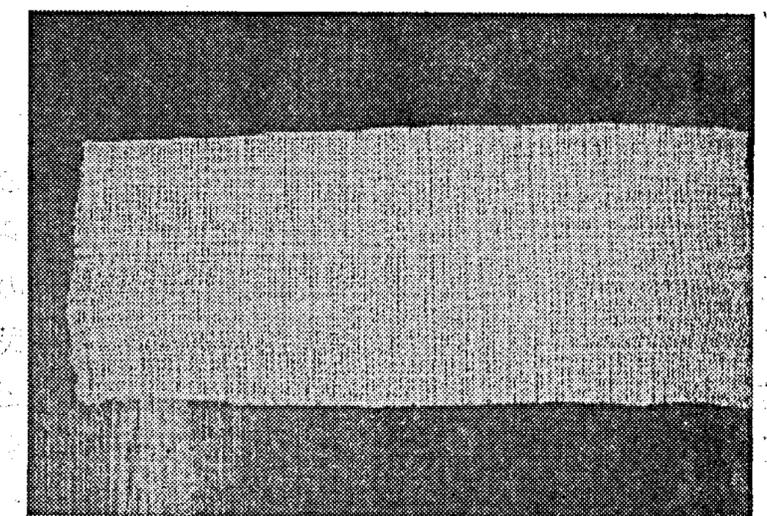


図2 太田氏の藤布資料

たに相違ない。私でさえそんな地に藤布が織られているなんて全く知らなかった」と、藤織り発見当時の感慨が生き生きと語られている（図3）。

3 廃村になった駒倉の藤織り

ところで、土田俊治氏は、同昭和37年に加悦町に藤布の保存育成のために丹後古代織布技術保存会を結成し、会長として尽力された方であるが、土田氏から太田氏への数種の手紙のなかには、下世屋に関するものはないが、昭和37年6月13日付けの、5月13日に竹野郡弥栄町味土野（藤織りの伝承地）へ遊びに行った時に見た藤についてふれたものがあり、またその翌年く

らいかと思われる4月27日付けの駒倉の藤布調査の手紙がある（図4）。

昭和47年で廃村になった駒倉の当時の記録は資料的価値があると思われるので関連の箇所を掲げてみた。

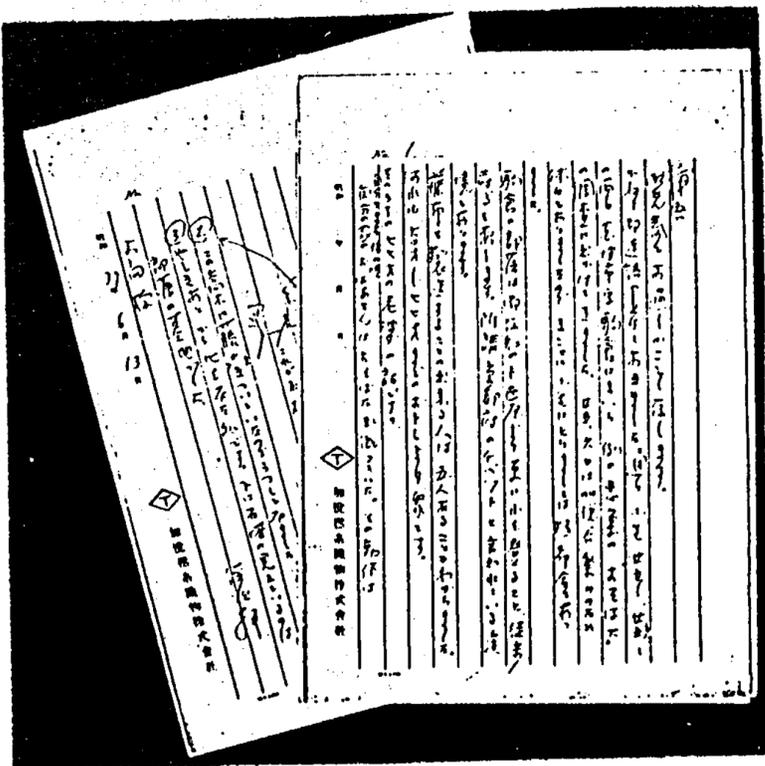
かねて御連絡申し上げておきました通り、小生、25日26日の両日宮津字駒倉にまいり、例の懸案の“おそばた”の調査に出かけてきました。

駒倉の部落は御存知の下世屋より更に山に登る



図3 昭和37年3月に藤布織りを調査したことの記載されている太田氏の「藤の衣」
（『京都の林業』昭和51年1月号）

図4 土田俊治氏から太田英蔵氏への藤布に関する手紙



こと徒歩2時間を要します。所謂京都府のチベットと言われている辺境であります。

藤布を製造することの出来る人は5人あることがわかりました。何れも60~77才までのおとしよりの衆です。そのうちの77才の老婆の話ですが、「自分がまだ娘の頃、自分の家のおばあさんはおそばたで織っていた。その動作はこの様子と…手や足を動かしながらおそばたを動かす動作を試みてくれました。だが現在は何処にやったかさっぱりわからないといいます。他の老婆達も此の目でおそばたは見ているが、どこにあるやらわからないといいます。今の早機とちがって道具も簡単なものであるので、おそらく燃やしてしまったのではないかとのことです。

藤もまだ若芽を出しかけた程度でした。村人の話では藤の花の満開になるのは毎年5月20日の寺の何とかの行事のときに花を供えることになっているとのことでした。26日に駒倉からの帰り路、天の橋立駅前の藤棚はすでに花房が二寸位に伸びているのを見ました。

すでにいずれも故人になられてしまったが、早い時期から旧世屋村の藤布織りに傾注されていたお二人の熱意がこの手紙のなかに生きてるように思われた。

4 藤織りの復活

この原始的な藤布織りが工芸品の素材として復活し、再度織られるようになったのは、さして古いことではない。

昭和52年4月、筆者の調査の為に種々ご配慮頂いた当時の宮津市農協世屋支所長の小川正史氏（上世屋村の出身者であるために藤織りにも詳しい）から聞いたところによると、昭和37年の発見のころから手づくりの厚みのある風格の藤布は見なおされてきたが、このように藤布が復活するに至ったきっかけは、前の農協世屋所長の隅垣幸氏（昭和45年5月から50年11月）が、兵隊仲間であった京都の織物問屋『秀粋』の社長である市田三喜雄氏と話し合い、そこに販路を得ることになってからという。

その詳細について知るために当時、京都市中京区のK.K 秀粋も訪ねてみたが、ここでは「京都 秀粋 織」の藤布の由来と効用、並びに一反を製織するのに百数十日を要するなどの説明文入りの「珍布 藤布 丹後宮津藤布保存会之証」（図5）を頂いただけで話を聞くことは出来なかった。

藤布の工芸品としての活用にはいろいろな製品作りが試みられたようである。その為に糸の太さも吟味し、織幅も着尺物の幅から座布団幅を満たす幅のオサを使うようになった。

ここに、上世屋の大火後の昭和20年代に織られたと思われる袋（上世屋の光野ちゑ家で使用していたもの）藤布Aと、太田氏が昭和37年に下世屋で入手したと思われる藤布B（未使用）、ならびに昭和52年に小川ツヤ氏が織りあげたばかりの藤布C（新品）の三時期の布が揃ったので並べてみた（図6）。

比較してみると、藤布は使い古しのためもあってか、見るからに糸がつんでおり糸密度も濃く布幅も狭い。

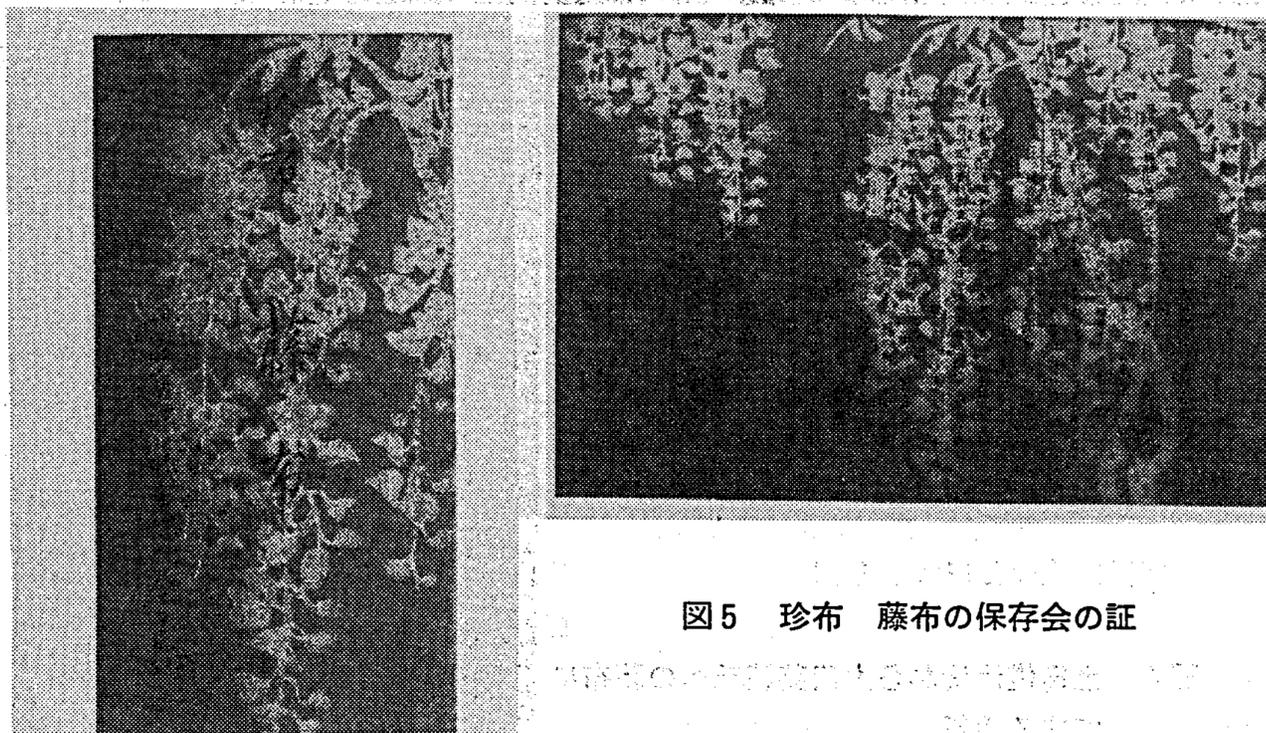


図5 珍布 藤布の保存会の証

未使用の藤布については、工芸品用生地として織られる以前と以後とでは、糸密度の数の上では大差ないように見えるが、工芸品用になってからはやや細目の経糸が2本1本と交互にオサに入っている本数のため薄手になっており、布幅も36センチから45センチにひろがっている。

昭和43年頃から座布団や帯やハンドバック地のために藤布が織られ始めているらしいが、昭和45年(3)によれば昭和41年には藤布保存会もできている。その当時の織り手の数は上世屋16人、下世屋5人、松尾1人、計22人だったと農協の藤布に関する資料をとじたファイルには残っていた。

昭和52年の調査当時も、藤布は全て農協を通してその「秀粹」とのみ取引されていた。織り初めのころは

年間10反程度の量で1反10万円くらいで取引されていたが、その後は50反余り織られるようになり、多過ぎた時は翌年は織らないなど調整に努力もしたが、価格も調査時は6～8万円くらいと下がってしまっていた。

そして藤布は、その素材の堅さのために、今日に於ける利用法にはおのずから範囲が限定されたものであろう、その後も大きく発展することはできなかったようである。

『丹後の紡織Ⅱ』(4)によれば、昭和56年を最後に世屋支所を通じての販売は行なわれなくなり、細々と個人とりひきで売られている程度だというのが、その代わり京都府立丹後郷土資料館の藤布関係資料の保存研究と技術の伝承のための努力によって手厚く守られるようになっている。

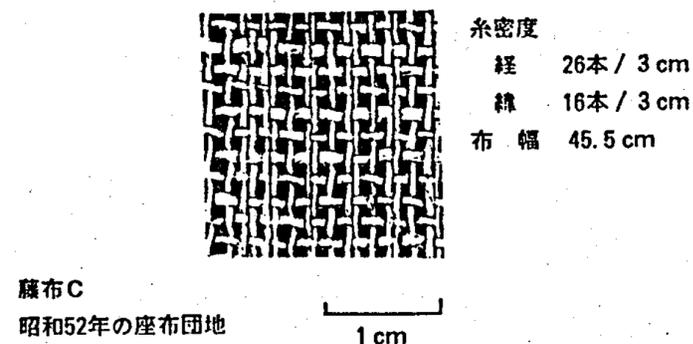
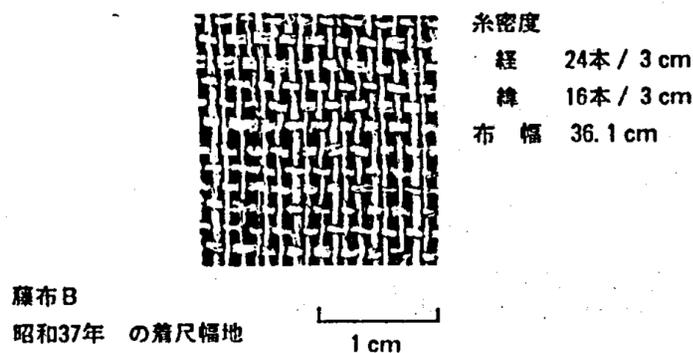
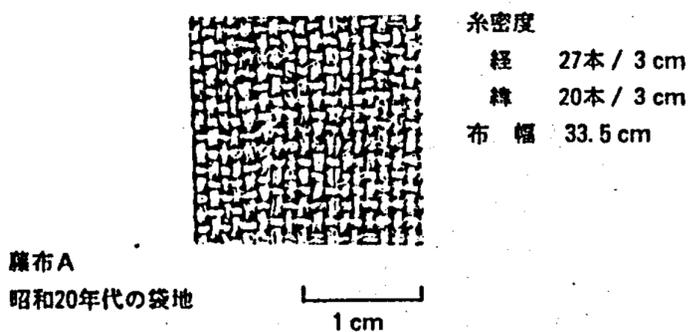


図6 各時代の藤布の糸密度

文 献

- (1) 山崎光子「藤布織りの作業工程—宮津市上世屋の場合」『民俗服飾研究論集』(日本家政学会民俗服飾部会)第2集, 1987
- (2) 『日本民芸織物全集』第1巻 15~16頁 民芸織物図鑑刊行会, 1965 並びに『日本伝統織物集成』89~90頁 染織と生活社 1976 (いずれも同じ編者によるもの)
- (3) 京都府立丹後郷土資料館編 特別展図録12 『藤織りの世界』1981
- (4) 京都府立丹後郷土資料館編 『丹後の紡織Ⅱ』58頁 1986